

平城宮跡・飛鳥藤原宮跡発掘調査

平城宮跡発掘調査部

平城宮跡発掘調査部は、平城宮跡において、第63～71次にわたって発掘調査を実施した。第63・71次は宮域西辺の馬寮地区、第69次の調査は宮中央部の推定第一次内裏、第70次の調査は推定第二次内裏東外郭部についておこなったものである。第59次の調査は昨年度末におこなったが、第63次の調査区と隣接し、同一官衙にあたるので、今回一括、報告した。第64～68次の調査は現状変更にもなう事前調査である。第68次の調査地点は、宮外であるが、平城宮東院推定地の南に隣接する京域である。完全な調査が望まれたが、業者の十分な協力が得られず、小地域の発掘調査にとどまり、破壊されてしまったのは残念であった。そのほか、第64次以外の調査は、発掘面積が狭く、遺構の性格が明確でなかったため、今回の報告では割愛する。

また、飛鳥藤原宮跡においては、小治田宮推定地・豊浦寺跡・雷丘東方遺跡・藤原宮跡第2次の発掘調査を実施した。小治田宮推定地の発掘は明日香村豊浦地区の水田中にある「古宮土壇」の周辺部で行ない、宮跡と推定できる遺構を確認した。豊浦寺跡と雷丘東方遺跡の発掘調査は現状変更にもなうもので、後者は飛鳥浄御原宮推定地の西辺にあたる。藤原宮跡第2次の発掘調査は、朝堂院回廊東北の外側域においておこなった。各次別の調査面積・期間・遺構の規模・時期については第1表を参照されたい。

調査回数	調査区	調査地	調査期間	調査面積
63	6ADC—G・H・L・M	馬寮北域	1970. 5. 1 ~ 1970. 7. 27	44.6a
64	6ALC—W	平城宮東張出部東辺	1970. 4. 16 ~ 1970. 5. 16	1.9
	6ALD—A			
65	6AAN—M	内裏北方官衙地区	1970. 5. 8 ~ 1970. 5. 12	0.3
66	6AFB—F・H	左京一条三坊十五坪	1970. 5. 7 ~ 1970. 5. 23	2.5
67	6ACO—A	宮城西北部	1970. 7. 1 ~ 1970. 7. 4	0.9
68	6ALG—A・B	左京二条二坊六坪	1970. 7. 10 ~ 1970. 7. 20	5.5
69	6ABP—A・B・D	推定第1次内裏	1970. 8. 3 ~ 1970. 11. 21	34.15
70南	6AAE—N・M	推定第2次大極殿東外郭	1970. 11. 1 ~ 1971. 1. 25	31.2
70北	6AAD—G	推定第2次内裏東外郭	1971. 1. 6 ~ 1971. 3. 10	17.0
71	6ADD—Q・N	馬寮南域	1971. 2. 16 ~ 1971. 5. 11	40.0
	6ADE—A・B・K			
飛鳥	5AOH—J・H・I	小治田宮跡推定地	1970. 5. 20 ~ 1970. 11. 11	21.4
	5BTU—K	豊浦寺跡	1970. 12. 14 ~ 1970. 12. 25	1.0
	6AMO—O	雷丘東方遺跡	1970. 12. 15 ~ 1971. 1. 30	5.0
藤原宮跡 2	6A JF—E	藤原宮大極殿東方	1970. 7. 15 ~ 1970. 11. 30	12.0

第1表 1970年度発掘調査状況

馬寮北城（第59・63次調査） 調査地は1968年度の4回の調査で馬寮と推測した宮城西北部の西面北門に近接する地域である。検出した遺構は掘立柱建物33、柵5、築地2、溝10などである。これらの遺構は柱穴の重複関係などから4期に分けることができる。

A期は、この地域に大規模な造営を行なった時期で、調査地域西端を南北に走る柵SA3680と同じく東端を南北に走る柵SA5950によって東西を画されている。これらの柵は第25次、第47次、第50～52次調査で検出したものの北延長部にあたる。SA3680は今回24間分を、SA5950は23間分を検出したが、両方とも北端はさらに調査地域外にのびている。SA3680の西約10mのところ、西面大垣の側溝と犬走りの一部を検出した。SA5950に直角にとりつく築地SA6475は官衙の北を限るものである。入隅には築地の下に木樋の暗渠が設けられており、築地に沿って走る北側の溝に流れ込んでいる。またこの築地の北にある平坦地SX6502は宮城西面北門から東に延びる道路にあたる。

調査地域中央部で検出した掘立柱建物SB6450は桁行7間、梁行4間の南北に廂のつく東西棟の建物で、その位置や規模からみて、この官衙の正庁と考えられる。この建物の北にある東西棟の建物SB6469は桁行4間分を検出したが、さらに西方へ延びている。南北棟SB6425は、当初桁行7間、梁行2間の規模であったが、のちに改造されて、北に6間分をつぎたして、13間になったと考えられる。

調査地域東部では柵の東を南北に走る築地SA6150を検出した。この築地は西側の築地SA6475のほぼ東延長線上で東に折れ曲り、調査区域外へのびている。この築地は第37次調査で検出した官衙のそれぞれ西・北を限るものである。この築地の東にある南北棟の建物SB6487はこの時期と考えられる。またそれぞれの官衙を画する柵SA5950と築地SA6150との間を南北に走る幅約9.5mの空間地は二つの官衙の間を通る道路と考えられる。

B期には、A期の柵SA3680をとりのぞき西面大垣に至る範囲まで広げて利用している。SB6400は東西に廂のつく南北棟で桁行11間、梁行4間分を検出した。調査地域中央には柱通りをそろえてSB6185・6195・6385の3棟がある。いずれも第52次調査で東半分を検出しており、今回の調査で全規模

	遺 構	柱 間 数	柱間寸法 桁 × 梁	備 考		
A 期	SA 3680 南北柵	24以上	2.7	南北 廂		
	SB 6425 南北棟	13×2	3.0×3.0			
	SB 6450 東西棟	7×4	2.9×2.9			
	SB 6469 東西棟	4以上×2	2.6×2.4			
	SB 6487 南北棟	5×2	2.7×2.7			
	SA 5950 南北柵	23以上	2.6			
	SA 6475 築 地				巾 3 m	
	SA 6150 築 地				巾 4 m	
	B 期	SB 6185 東西棟	7×3		3.0×3.0(3.9)	北 広 廂
		SB 6195 東西棟	7×2		3.0×2.4	
SB 6360 南北棟		8×3	2.1×2.1	東西広廂		
SB 6385 東西棟		7×2	3.0×3.0			
SB 6400 南北棟		11以上×4	3.0(3.4)×3.0			
SB 6172 南北棟		9×2	2.8×3.0			
SB 6385 東西棟		7×2	2.7×2.7			
SB 6430 東西棟		13以上×4	2.4×2.8			
SB 6454 南北棟	4×1	2.7×4.5				
C 期	SB 6190 東西棟	5×2	2.9×2.4	東西広廂 南 広 廂 東 西 廂		
	SB 6381 東西棟	5×1	3.0×3.0			
	SB 6401 南北棟	7×4	2.4(3.3)×2.7			
	SB 6420 東西棟	6×3	3.0(3.3)×2.4			
	SB 6175 南北棟	21×4	2.4×2.4			
D 期 時 期 不 明	SB 6460 南北棟	5×4	2.7×2.7	東 西 廂 総 柱 柱		
	SB 6330	3×3	1.8×1.5			
	SB 6340	3×3	1.8×2.1			
	SB 6345 南北棟	6×2	3.6×3.6			
	SB 6403 南北棟	6×2	3.0×3.0			
	SB 6410 南北棟	2以上×2	1.5×2.4			
	SB 6451 南北棟	5×2	3.0×2.6			
	SB 6453 東西棟	3×2	1.9×2.6			
	SB 6464 南北棟	2×2	1.8×1.8			
	SB 6500 南北棟	4以上×2	2.6×2.7			

第2表 馬寮北城の主要遺構

馬寮南域(第71次調査) 調査地は西南中門の東、第25次の調査地に接するところである。この地域はさきの第63次調査同様「馬寮」の一部であり、西面中門の關係からその南の境界が推測されるところである。

検出した主な遺構は掘立柱建物・柵・溝・井戸などである。

調査地域東部の柵 S A 5950は、官衙の東を画するもので、今回13間分を検出するとともに、その南端を確認することができた。またこの柵 S A 5950の東 8 mのところを平行して、南北に走る溝 S D 5960は柵の南端のほぼ延長線上で東に折れる。調査地域西北にある南北棟 S B 6100は第50次調査で、桁行16間、梁行2間の建物であることが判明していたものであるが、今回の調査によって西側の柱列の南から3間分だけ廂がつくことが判明した。調査地域南辺のほぼ中央部で一部分であるがバラス敷面を確認した。これは西面中門より東に通じる道路敷の一部分と推定される。

以上にあげた遺跡のほか、平安時代に属する井戸4基、調査地中央では時期不明ではあるが小規模な各種掘立柱建物が重複した状態で検出された。また平城宮以前の遺構として弥生時代・古墳時代の穴や溝がある。出土遺物は瓦・土器が主なものであるが、他の地域に比較して量は少ない。瓦では藤原宮式がめだつ。

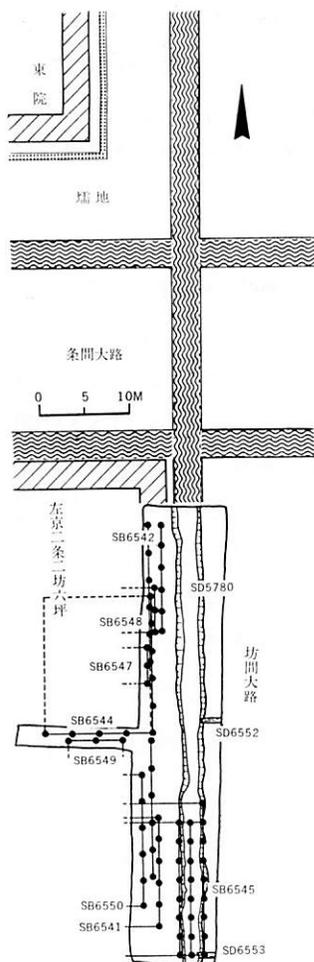
以上、7次におたる発掘調査で、掘立柱建物・柵・築地をはじめ多数の遺構を検出した。建物群は数回におたる造営が認められるが、これらはすべて築地と柵に囲まれた区画内にある。しかもこれらの建物群は主に区画内の北部に集中しており、中央部は広い空間となっている。また建物には桁行が14~21間

	建 物		柱間数	柱間寸法 桁 × 梁	備 考
奈良	S B 6100	南北棟	16×2	2.4×2.4	西側南寄3間分に廂
平	S B 7024	東西棟	3×2	2.0×2.0	
	S B 7026	東西棟	4×2	2.1×2.0	
安	S B 7027	南北棟	2×1	2.4×2.4	
	S B 7028	東西棟	4×3	2.1×1.9	
時	S B 7029	東西棟	3×1	2.1×1.8	
	S B 7030	南北棟	2×2	2.0×2.0	
代	S B 7060	東西棟	4×2	2.0×2.1	
	S B 7061	南北棟	2×2	2.2×1.6	
	S B 7100	南北棟	3×1	2.1×2.1	

第3表 馬寮南域の主要遺構

という宮の他の地域では見られない非常に間数の多いものが集まっていることはこの地域の特色といえる。これらの建物が東西を84m(28丈)をへだてて南北に走る柵 S A 3680と S A 5950、北は築地 S A 6475で囲まれていることは先述のとおりである。南については西面中門からの道路の一部と思われるバラス面及び東の柵 S A 5950、西の柵 S A 3680とでは若干の出入りがあるが東の柵の南端を境界と考えると南北は254m(84丈)になる。

以上のような官衙ブロックについては、すでに1969年度年報において報告し、これを主馬寮と推定した。今回の発掘調査と一連の調査における出土遺物の整理の段階で、新たに墨書土器「内厩」2点、「主馬」1点を発見した。この発見によって少なくとも奈良時代末期に主馬寮・内厩^{註1}なる官司が置かれたことがいっそう確実視されるに至った。以下、主馬・内厩両寮について若干述べる。内厩寮は天平神護元年(765)2月、近衛府の設置と同時におかれた官司で、任官記事からみると近衛府官人との兼職が多い。また、主馬寮は設置年時を詳かにできないが、頭、助の任官は天応元年(781)が初見である。一方、令制の左右馬寮は宝亀



第2図 左京二条二坊六坪遺構配置図

10年(779), 左馬頭正月(牟都支)王の任官を最後に大同3年(808)まで史料には見えないことから, 左右馬寮は主馬寮に統合されたものといえよう。

このように奈良時代末に設置された内厩, 主馬両寮は大同3年に廃され, もとの左右馬寮が復活するのである。上述のとおり, 主馬, 内厩と墨書された土器の発見によって, 奈良時代末には両寮がこの地域に存在したことが確定的であるし, 発見遺構の重複関係から奈良時代を通じて同規模の官司が存在していたことが判明する。平安宮古図によれば, おおよそのところ宮城西方の位置に左右馬寮があり, 発掘調査による官衙の規模もほぼこれと一致している。

平城宮東張出部東辺 (第64次調査) この調査は住宅建設にとまなうものであるが, この地は宮の東西大垣及び宮城門が想定される地域である。発掘調査の結果, 宮城門想定地については凝灰岩の散乱を一部確認したにとどまり, 門跡と見られる確かな遺構は検出できなかった。

東大垣については築地本体の痕跡は検出できなかったが, 大垣の外濠と考えられる幅1.2mの南北溝を検出した。

左京二条二坊六坪 (第68次調査) ボーリング場建設にとまなう緊急調査として, 東院東南隅に隣接する地域で行った。すでに第44次の調査で明らかにされている条間大路西側溝の南延長上に設定した東西10m, 南北50mのトレンチで建物8, 柵4, 木樋暗渠2などを検出した。

大路西側溝SD5780の西では建て替え, 削平がはなはだしく, 第44次調査で推定した築地の痕跡は認められなかった。この溝と重複してSB6545がある。桁行8間以上, 梁行2間以上をかぞえるが, 溝と同時期の可能性があり, 溝上に張り出しをもった建物であろう。ほかの建物はすべて築地推定線に東側柱, 妻柱などをそろえて建てている。また柵SA6543も築地推定線上にのっている。木樋暗渠2条のうち, SD6553はSB6545より新しい。

遺物は溝SD5760より土器・木器・瓦・木簡など多量に出土した。東院に多くみられる三彩陶器や緑釉瓦, 「東隅」・「東南隅」などの墨書土器, 堅櫛・斎串などの木製品, 他に和同開珎・万年通宝・麻布・漆曝布などがある。

木簡も79点出土した。内容的にはまとまったものはないが, 「憶漢月萬里望向関」と記したものは日本漢文学史上貴重なものといえよう。また, 大和国添下郡からの米の貢進札, 嶋主なる人物が銭出奉したきの記録などに注目すべきものがある。

推定第1次内裏 (第69次調査) 調査地域は、推定第1次内裏跡(口絵)で、推定第2次内裏後宮西方に並行する位置にあたる。推定第1次内裏については、これまでの第7・27次の調査で外郭を画する築地回廊が確認されているが、今回、新たに築地回廊内の主要な一郭が明らかとなった。検出した主な遺構は、掘立柱建物13・礎石建物2・塀1・埴積段・階段などで、前後4回の造営期にわかれる。

A期 調査地域南に段S X6600(口絵)がある。この段は北から南へゆるく傾斜する地形の南部を削平して作っている。段は現状で1.5mの落差があり、70度の傾斜がある。斜面は埴を横積みにして化粧している。現存する埴積みは最も残っているところで7段ある。もともとは、段の落差は2.5~3m程で、30~40の段埴を積み上げていたと思われる。今回の調査では、S X6600は東西63mを検出したが、東西両端は調査地域外にのびている。段S X6600の基底は推定第1次内裏回廊内を、南北にはほぼ3等分した線上にあり、この一郭の南限を画している。段S X6600の南前面一帯は砂利を敷きつめている。また、この段には、朱雀門中軸線の延長上にあたる部分に、木製の階段S X6601(口絵)がとりついている。建物はこの階段をのぼった正面約9mのところ、同じ中軸線上に位置して、正殿風建物S B6605がある。A期の建物は、のちの削平がいちじるしく、確認できたものはこの1棟だけであった。

この時期の遺物は、土器と瓦があるが、極めて少量であった。とりわけ瓦の出土が少ないのはこの地域の建物が瓦葺以外のものとみられ、この一帯の遺構の性格を推測させるものがある。

B期 埴積段の前面に置土して、敷地を南へ拡張し、北面の築地回廊もつけかえるなど、この一郭の敷地全体を南へずらしている。同時に、建物も全面的に建て替えているが、それらはすべて10尺方眼地割にのって整然と配置されている。正殿となる東西棟建物S B6610は桁行9間、梁行9間以上の建物で、朱雀門からの中軸線上に位置している。奈良時代の建物でこのような建物を考えることは、技術的に難しく、前後2棟にわかれるものと考えた方がよいであろう。(1971年度の第72次調査で、この建物は全規模が明らかになった。それによると3棟の建物が軒を接して、前後に並んでいる。)このS B6610の東妻柱列よりちょうど60尺離れた

	遺	構	柱間数	柱間寸法 桁 × 梁	備考
A期	S B 6605	東西棟	7×2以上	3.0×3.0	
	S B 6610	東西棟	9×9以上	3.0×3.0	
B期	S B 6640	東西棟	3×2	3.6×3.0	
	S B 6650	東西棟	3×3	3.6×3.0	
	S B 6655	南北棟	3×2	3.0×3.0	
	S B 6656	南北棟	3×2	3.0×3.0	
	S B 6660	東西棟	7×4(5)	3.0×3.0	南北廂
	S B 6663	東西棟	7×5	3.0×3.0	南北廂
	S B 6666	東西棟	7×2	3.0×3.0	間仕切り
	S B 6669	東西棟	7×2	3.0×3.0	間仕切り
	S C 6670	東西廊 (?)	6以上	3.9	
	S B 6620	東西棟	9×5	3.0(4.3) ×3.0(4.3)	四面広廂
C期	S B 6621	東西棟	5×4	2.6×3.0(4.2)	
	S B 6622	南北棟	5以上×4	3.0(4.2)×3.0	東西廂
	S A 6623	南北塀	7	3.0	
	S A 6624	東西塀	9以上	3.0	
	S A 6625	南北塀	12	3.0	
D期	S A 6626	東西塀	6以上	3.0	
	S B 6630	東西棟	7×3	3.0×5.7(3.0)	北孫廂
	S B 6614	東西棟	3×2	3.0×2.7	北廂

第4表 推定第1次内裏主要遺構

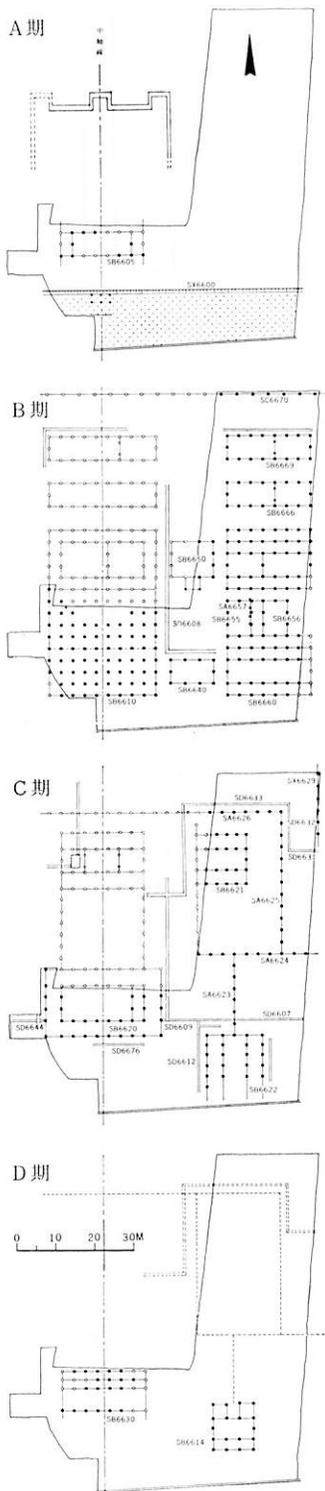
ところで、西妻柱列通りをそろえて、5棟の東西棟の脇殿が、整然とならんでいる。南からS B 6660・S B 6655・S B 6656・S B 6663・S B 6666・S B 6669となっている。さらに正殿とこれら5棟の間には、2棟の東西棟建物を配している。このうち南の1棟S B 6640の桁行柱間は、60尺を5等分した12尺となっている。調査区北端には礎石柱列S C 6670がある。推定第2次内裏北面築地回廊南側柱列の西延長上にあり、柱間も一致することから、推定第1次内裏北面築地回廊を南へつけかえたものと推定した。なおこの時期は、のちに東脇殿の小改造をおこなっている。すなわちS B 6655・S B 6656が廃されて、目隠塀S A 6657にかえられ、同時にS B 6660に北孫廂をつけている。

S B 6663の柱抜跡より多量の軒瓦が出土した。なかでも6732型式(東大寺式)軒平瓦と6282型式軒丸瓦が多い。また、建物配置が推定第2次内裏後宮のB期と極めて似ている。

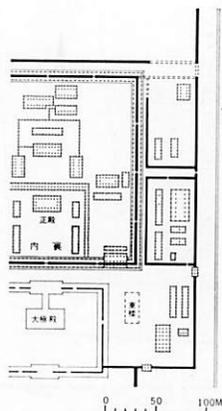
C期 再び建てかえがおこなわれ、建物配置が全面的に変る。朱雀門中心軸延長上に正殿S B 6620を配置しているが、脇殿はS B 6622のみで、しかも南北棟である。北方には後殿風建物S B 6621がある。この建物は廂は掘立柱で、身舎部分は礎石柱となっている。S B 6621とS B 6622のあいだには縦横に塀がめぐっている。この時期の建物が、推定第2次内裏C期と同様に、広廂を特徴としていることから、推定第2次内裏後半の時期、奈良時代末と考えられる。なお、S X 6629は大膳職の真中を走る柵S A 304の南延長上に位置するが、現在のところ柵か、建物か不明である。

D期 C期の建物配置を踏襲しているが、規模は縮小されている。その配置から考えて、C期の塀がそのまま継承された可能性がある。時期は、平城上皇のころと考えられる。

以上のように今回調査した一郭は、内裏と密接な関係もっていることが判明したが、整然とした建物配置が奈良時代全代を通じて維持されているなど、第1次内裏と第2次内裏の存在をめぐって大きな問題が残されていると言える。今後の調査による解決が待たれよう。なおD期の建物が平城上皇の時代の中心的なものであった可能性がある。



第3図 推定第1次内裏変遷図



第4図 内裏及び東外郭配置図

推定第2次大極殿・内裏東外郭（第70次調査） 調査地は、推定第2次大極殿・内裏の東外郭部にあたる南・北2地区である。この調査で、東外郭部のほぼ全域の調査を終了した。

南地区 第33次と第35次の調査区に挟まれた地域で、推定第2次大極殿の東側にあたる。検出した遺構は、築地・礎石建物・掘立柱建物などで、前後3時期に分かれる。

A期 S B 7550など3棟の建物がある。S B 7550は、すでに第35次の調査で南半分を確認していたが、桁行13間、梁行2間の南北棟にまとまることが判明した。

B期 この地域の中心的な時期で、東面築地SA705に画された一郭に整然と建物が配置されている。礎石建物SB7500はすでに第40次の調査で南半部を確認していたが、桁行7間、梁行4間の大規模な倭風の建物で、西側中央に桁受石があり、木製の階段をつけている。従来東倭跡とされる土壇が西側にあり、この両者の関係が問題となる。SB7500の北側には柱列をそろえて、同一規模の2棟の南北棟SB6700・S B 6701が並び、同じく東側にはSB6710がある。この礎石建物を中心にした一郭が、内裏外郭・大極殿回廊、およびいわゆる東倭跡などどのような関係にあるかは、今後の課題である。

C期 礎石建物の東側一帯を整地しているが、建物は1棟をかぞえるのみである。なお、遺物は土壌などから多量に出土している。とりわけ瓦の出土量が極めて多い。「本直七左…」・「…直三右…」と線刻された埴や三彩・二彩・緑釉陶器などの破片も出土している。

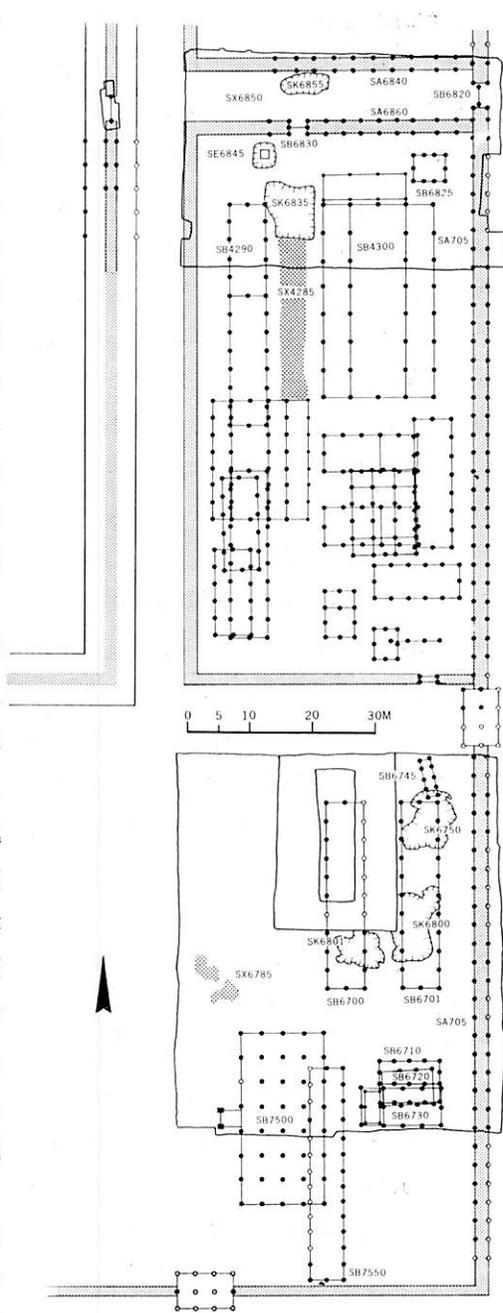
北地区 第21次と第33次の調査区に囲まれた地域で、第2次内裏東外郭部にあたる。調査区東端を南北に走る東面築地S A705は築地本体の積土がよく残存しており、寄柱の穴と積土との関係から数回の改築が認められる。その時期は明らかでない。この築地には門S B 6820がついている。この門は、内裏を囲む北面築地回廊と南面築地回廊間々距離の2等分線上に位置しており、平安宮の建春門にあたる。この門から内裏の東面築地回廊中央閤門(平安宮宣陽門)に通じる幅6mの道S X6850があり、その両側には築地SA6840とSA6860があつて、内裏東外郭部を南北に2分割している。S B 705とS A6860に限られた南の一郭には、礎石建物S B 4300(口絵)がある。第33次の調査ですでにその南半部を確認していたが、今回新たに南北3間、東西4間分の礎石すべてが原位置を保って検出された。柱間4.45mで桁行7間、梁行4間をかぞえ、基壇規模南北34m、東西20mをもった大規模な建物である。また

	遺構	柱間数	柱間寸法 桁×梁	備考
70期	A S B 6720 東西棟	3×(2)	2.7×2.8	
	S B 6745 南北棟	4×1	1.5×1.6	
	S B 7550 南北棟	13×2	2.4×2.4	
南B 期	S B 6700 南北棟	10×2	3.0×3.0	南広廂 礎石建物 西中央有階
	S B 6701 南北棟	10×2	3.0×3.0	
	S B 6710 東西棟	4×3	2.3(3.0)×1.9	
	S B 7500 南北棟	7×4	3.8×3.4	
70 次 北	C S B 6730 東西棟	4×2	3.0×3.0	3.0×3.0
	S B 4290 南北棟	12×2	3.0×3.0	間仕切り 礎石建物 北土廂
	S B 4300 南北棟	7×4	4.4×4.4	
	S B 6825 東西棟	3×2	1.7×2.1	

第5表 推定第2次大極殿・内裏東外郭の主要遺構

のちには北側に土廂をつけたしている。この建物の西側には、石敷道路SX4285をへだてて、SB4290が南北に長く建っている。ほかに、井戸SE6845、SB6825がある。SB6825とSB4300の東北隅一带には炭灰の充満したピット群・溝などがあり、この一郭で金工か鍛冶が行なわれたようである。なお調査区域西端は地山面まで削平されているため、西側の築地を検出することはできなかった。しかし第33・21次調査で検出した東西溝SD4240・SD2350・SD2000が、SA705の心から西へ約47mのところ、おのおの暗渠となっている。したがって、この部分に南北に走る築地が存在したことはほぼ確実であろう。

今回の調査をもって推定第2次内裏大極殿東外郭部のほぼ全貌が明らかとなった。それによると東外郭部は、内裏および大極殿一郭の東に隣接し、築地によって囲まれた南北に細長い敷地をもち、築地・道路等により南北に3分割されている。それぞれの区域には東南廂をもった中心建物を置き、南北棟を主体としている。内裏外郭部は、その北限が未調査で断定はできないが、内裏造営計画線によって南北に2等分されていることからみても内裏と最も密接な関係をもった官衙であろう。SA705の東を流れる大溝SD2700の上流に「宮内省」等の墨書土器が出土しており(年報1965)宮内省との関連が考えられる。また大極殿東側の一郭が、内裏外郭部とどういふ関係にあるかについては今後の調査に待たねばならない。



第5図 推定第2次大極殿・内裏東外郭遺構配置図

なお、今年度報告した平城宮跡の発掘調査で出土して木簡の主なものは「平城宮跡発掘調査出土木簡概報(八)」(1971年)に収録した。

註 1 亀田隆之「内廐寮考」続日本紀研究5—5(1958)

(横田拓実・石松好雄・田辺征夫)

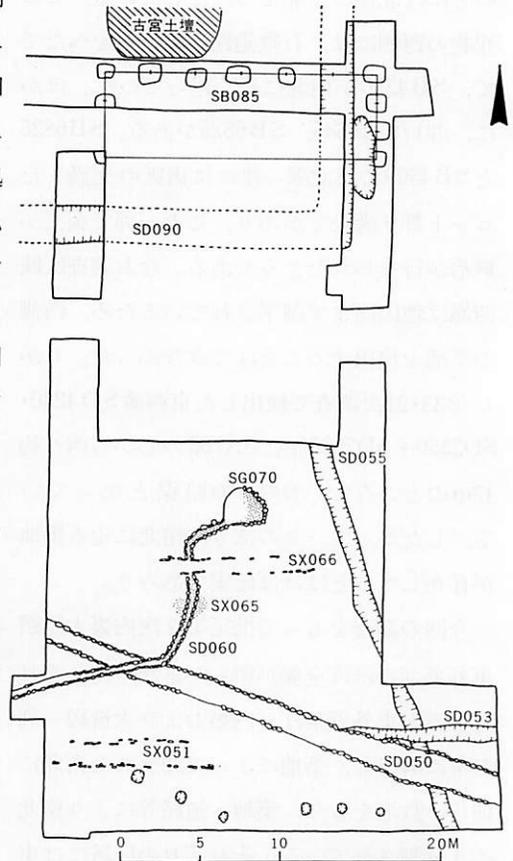
小治田宮跡推定地 小治田宮の所在地に關しては、飛鳥岡本宮と同所、雷丘東方の地に推定する喜田貞吉説など諸説があった。今回発掘調査した明日香村豊浦と橿原市和田とにまたがる地が有力である。推定の主な根拠は、1)蘇我稲目の「小墾田家」・「向原家」に仏像を安置したといい、それが豊浦寺の前身であると考えられること、あるいは日本書紀の朱鳥元年に五寺の一として、「小墾田豊浦寺」をあげていることなどから、小墾田は豊浦寺の近くを指す地名があるいはそれを含むより広域を示す地名と考えられること、2)小字名に「古宮」という名称をとどめ、ここに建物の基壇跡かとみられる小土壇が現存し、古瓦の散布が認められること、3)「古宮」土壇の近くの水田下から、明治11年に金銅製四環壺が出土していること、4)付近の水田地帯は、東西・南北300m四方ほどの範囲が周囲より一段と高い平坦地となっており、古代の宮殿が立地するのにふさわしい地形を示していることなどがあげられる。今回は「古宮」土壇の

周辺を発掘し、掘立柱建物・石組大溝・素掘りの溝・庭園などの遺構を検出した。この地域の旧地形にはかなりの起伏があって造営に先立って地ならしが行われている。

発掘区の各所で、掘立柱建物の柱穴と思われる遺構を検出している。規模を確認できたのはSB085のみであった。SB085は6間×3間の東西棟で、「古宮」土壇のすぐ南側、かつて金銅製四環壺が出土したと伝える付近でみつかった。柱穴から出土した土器や、柱間寸法が奈良尺(9.5×6尺)よりも高麗尺(8×5尺)の方が完数が得られることなどからみて、後述するSD050や庭園遺構同様7世紀前半から中頃の時期のものとしてよいだろう。

SB085の南方約30mで、東南より西北へ流れる大溝SD050を検出した。まっすぐに47m以上のびており、その走行は東西に対して北に20度ふれている。幅1.5~1.8m、深さ0.4~0.6m、両側には0.2~0.4m大の河原石を2~3段積みあげている。堆積層の状況からみて、かなりの流水があったと認められる。堆積層から土師器・須恵器が多量に出土している。

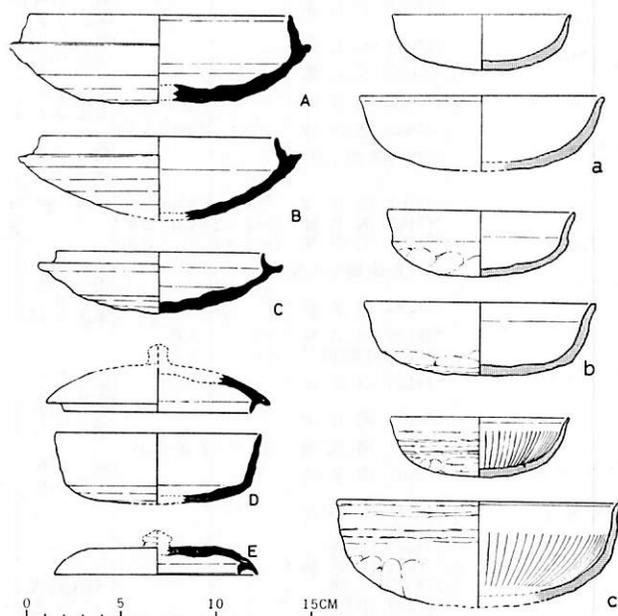
この大溝の北側には、小規模な庭園がある。池SG070から、玉石溝SD060へ、水が流れ出るようになっており、周囲は、石だたみSX065となっている。池SG070は、楕円形の平



第6図 小治田宮推定地遺構配置図

面をなし、こぶし大から人頭大の河原石を、深さ0.5mほどの摺鉢状に貼りつけている。縁には特に大きな石を配している。西半部は破壊されている。玉石溝SD060は蛇行して西南へ向い、大溝を切っている。先端は調査地域外にのびる。この溝は、側に河原石をたてにならべ、底に河原石を敷いている。ところがSD050との交叉点以南では、底石はなく、側石も貧弱である。したがってSD060は当初大溝より以北のみがつくられ、大溝に流れ込んでいたが、大溝廃絶後に南に延長した可能性もある。石だたみSX065はこぶし大の河原石を用いている。小範囲しか現存していないが、周囲には、河原石が夥しく散乱している。本来は、広範囲であったと考えられる。素掘りの南北溝SD124も、SD050と同時期のものと考えられる。以上より新しい時期の主な遺構としては、SX051、SX066、SD090などがあげられる。SX051及びSX066はともに1mほどの間隔で河原石を並べたものである。藤原京の南京極はちょうどこの周辺と推定されているので、これら遺構はそれと関連する可能性もあるが、時期的には検討すべき点を残している。SD090は、幅3mほどの素掘りの溝である。「古宮」土壇をなかに南北35m、東西40mの方形にめぐっている。出土遺物からみて中世のものと推定できる。また、「古宮」土壇の中央部には石積みがあった。その精査は今後に残したが、SD090とはほぼ同時期のものと考えられる。したがって、これを以って古い建物跡とする根拠はなくなった。

遺物は、土器と少量の瓦・埴がある。土器は池や各溝から多量に出土し、これらの遺構の重複関係から飛鳥時代土器編年の手がかりを得た。須恵器は、杯蓋からみると5型式に分類でき、AからEへの変化がたどれる(第7図)。これからみると大溝SD050はD、玉石小溝SD060・池SG070はEの時期までそれぞれ存続することが判る。



第7図 小治田宮推定地出土土器 (左・須恵器、右・土師器)

須恵器と共伴する土師器をみると、碗類は、粗雑なつくりのa・bから胎土は良質でヘラミガキ・暗文のあるcへと変化する。このほか、遺構をおおう暗褐色砂質土層出土の土器がある。土器は単純ではないが、それらのなかには、先述の土器と、藤原宮跡の土器との中間をつなぐ一群の土器がある。なお、縄文式晩期の土器や弥生式土器が断片ながら出土している。ほかに、SD060から出土した単弁蓮華文の埴(口絵)がある。これ



第8図 豊浦寺跡石列

は百濟軍守里廢寺出土例に類似する。瓦は、暗褐色砂質土層ないし床土から、単弁八葉蓮華文軒丸瓦など数点発見されたにすぎない。これらの瓦は豊浦寺・奥山久米寺出土のものと同範の可能性がある。

以上の事実から、この地域は広範囲に遺構が存在することがはっきりし、7世紀前半から中頃にかけて宮殿跡であった可能性が大きいといえよう。しかも、大構と庭園遺構との重複関係からすくなくとも2回にわたる造営が認められる。

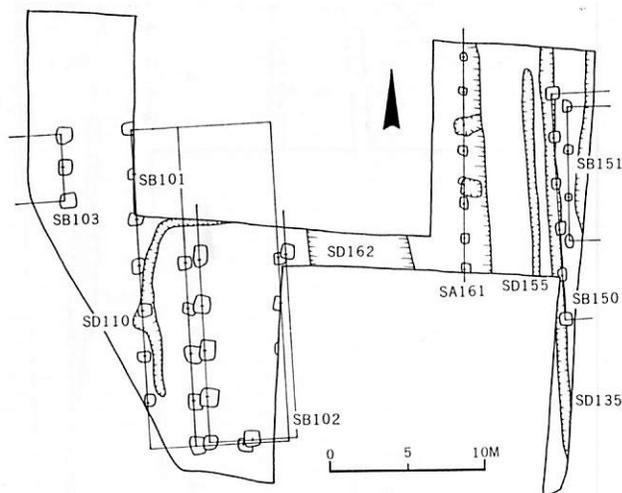
豊浦寺跡 この発掘は明日香村豊浦74-1番地の水田の宅地転用にとまなり事前調査である。現在の広厳寺本堂の北方50m、甘檜岡に連なる丘陵の東裾部にあたる。「古宮」土壇は、ここから北150mほどのところにある。小治田宮・豊浦宮・豊浦寺の関連を知るうえで重要な地点である。発掘地の西北隅の西側丘陵裾部で南北方向に並ぶ石列を検出した。長さ30cmほどの石を一列にならべたもので、東側を面としていた。その方位は、現在の広厳寺本堂と本堂前庭で発見された建築遺構の方位とほぼ一致し、真北に対し西へ18度ほどふれている。この石列の南方10mで拳大の小石を敷きつめた石敷を検出した。北と西側は後世の穴などによって破壊されており、南と東側は発掘区域外にのびる。その年代や性格は明らかでない。石敷の北側を破壊する穴は、径8m以上ある。中には夥しい量の瓦礫とともに礎石が3個投げ込まれていた。瓦類は飛鳥時代から室町時代に属するものがある。土器も近世のものにまで及んでいるので、埋めた時期を近世とすることができる。

以上によって、この調査地域が寺の境内であったことは明らかである。瓦礫を捨てた穴の存在や付近の地形などから判断すると、この地域は境内の西北隅に近い位置にあたり、石列はその境界となる施設かもしれない。

雷丘東方遺跡 この発掘は明日香村雷18-1番地の水田の宅地転用にとまなり事前調査である。雷丘の東裾にあたり、すぐ北方を「山田道」が通る。小範囲の発掘にもかかわらず、掘立柱建物5棟・掘立柱列1条・大溝1条のほか数条

	遺構	柱間数	柱間寸法 桁×梁	備考
小治田宮跡推定地	SD050 玉石溝			幅 1.8m 深さ 0.5
	SD060 玉石溝			幅 0.25 深さ 0.2
	SX065 玉石敷			
	SG070 玉石池			東 2.8 西 2.4 南 2.4 北 2.4
	SB085 東西棟	6×3	2.85×1.78	幅 2.5 深さ 0.7
	SD090 素掘りの溝			
雷丘東方遺跡	SB101 南北棟	7×3	3.0×3.0	西 廂
	SB102 南北棟	5以上×2	3.0×2.8	
	SB103 東西棟	1以上×2	2.1	
雷丘東方遺跡	SD110 素掘りの溝			幅 0.8 深さ 0.1 幅 0.7 深さ 0.15
	SD135 南北溝			
	SB150 南北棟	5×	3.0	
	SB151 南北棟(?)	3×	3.0	
	SD155 南北溝			幅 0.5 深さ 0.2 幅 0.4 深さ 0.15
	SD160 南北溝			
藤原宮跡第2次	SA161 南北柵	7以上	1.5~2.0	幅 8.0 深さ 0.6
	SD162 南北溝			
藤原宮跡第2次	SG520 玉石池			
	SD521 溝			
	SD523 溝			
	SA524 玉石溝			
	SD529 玉石大池			
	SG530 東西棟	6×4	4.5×4.5	弥生時代

第6表 主要遺構



第9図 雷丘東方遺跡遺構配置図

は桁行3m弱、梁行2.8mほどである。以上の3棟は柱筋の方位が西に2度ほどふれている。このほか、L字形に屈折する溝SD110がある。この溝はSB101の柱穴を切っている。

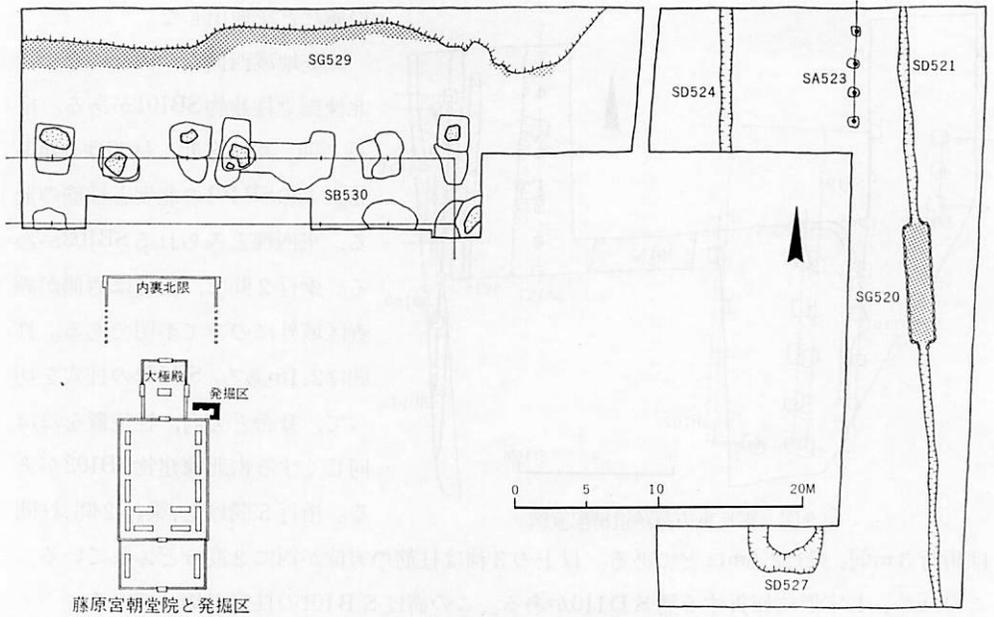
これらの東側に南北の素掘りの溝SD162がある。幅8m、深さ0.6mの大規模なものである。南北方向の掘立柱列SA161は、この溝の底面で検出した。柱穴は小さく、柱間寸法も1.5~2mと不揃いである。溝SD162の東側で検出した掘立柱建物SB150は桁行5間(柱間3m)の南北棟である。東側は発掘区域外で、梁行数は明らかでない。掘立柱建物SB151はSB150とほぼ同位置にあり、南北に3間(柱間3m弱)を検出した。桁行3間、梁行2間の南北棟かもしれない。このほか、南北溝SD135、155、160を検出した。SD135はSB150と重複し、後者より古い。これらの遺構の方位はSB151とSA161が真北に近いほかは、西地区のものと同方位である。

遺物には、SD110から多量に出土した土器がある。これらの土器は藤原宮跡出土の土器より、やや古い要素をもつものである。他の遺構からも土器が出土しているが、SD135出土の土器をのぞいてSD110出土土器に近いものが多い。この調査地域附近は、飛鳥浄御原宮跡推定地の西辺にあたる所で、それとの関連で注目されよう。SD135の土器は、奈良時代後半のものである。またSB150の柱穴から軒平瓦(平城宮6691型式)が出土し、周辺からも鬼瓦・軒平瓦(平城宮6721型式)が発見されている。

藤原宮大極殿東方(第2次調査) 調査は大極殿跡である大宮土壇の東南130mの地域で行なった。この地域は、日本古文化研究所の調査で、朝堂院回廊とその北側で礎石・根石を確認している地域の北方にあたる。今回の調査は、奈良県教育委員会の調査で東北隅を確認した内裏外部回廊の南延長部の追求と、それが日本古文化研究所の調査で検出した遺構とどのような関係にあるかを明らかにすることを目的としたのである。検出した遺構は、礎石建物1、柵1、池2、溝4などである。朝堂院回廊の北30mの所で検出した礎石建物SB530は、

の溝などを検出した。

調査地域西側に、西廂つきの南北棟掘立柱建物SB101がある。桁行7間、梁行3間、柱間は3mある。このSB101の北妻と柱筋の通る、東西棟とみられるSB103がある。梁行2間で、桁行は西側が調査区域外にのびて不明である。柱間は2.1mある。SB101の柱穴を切って、身舎と方向、柱位置をほぼ同じくする南北棟建物SB102がある。桁行5間以上、梁行2間、柱間



第10図 藤原宮大極殿東方遺構配置図

大きな礎石を使用した東西棟である。礎石は、6ヶ所で検出したが、ともに後世に移動し、原位置を保つものはなかった。調査地域が限定されていたため建物の全規模は確認できず、桁行6間分、梁行1間分(柱間ともに約4.5m)を検出したにとどまった。これに日本古文化研究所の調査の結果をあわせると、SB530は、大極殿回廊までの距離からみて桁行7間か9間、梁行4間の建物に復原できる。SB530の北約6mで石敷の池SG529を検出した。

調査地域東側では、玉石池SG520と南北に延びる溝SD521を検出した。SG520は、南北長さ8m、幅1.8m、深さ0.15mあり、床面には拳大の扁平な河原石を敷きつめ、側壁には同様の石を立て周囲をめぐらせている。SG520の南と北にSD521が取りつき、南から北に流れる水を溜める池として設けられたものであろう。SD521の西約3mの所に掘立柱列SA523を検出した。調査地区内で3間分(柱間2.1m)確認し、いずれも柱根が遺存していた。この他、弥生時代終末期から古墳時代初期にかけての溝SD527を検出している。

調査地全域で多量の土器・瓦が出土した。特に礎石建物周辺では瓦の出土が顕著であり、軒瓦では6275・6643型式のものが多い。

内裏の規模および朝堂院との関係確認を目的とした調査であったが、発掘地区内では所期の目的を達することができなかった。しかし、内裏の外郭と予想される地域で、かなりの規模をもつ建物と庭園関係と思われる遺構の存在を確認することができ今後の調査に大きな期待をもたせるものとなった。

(木下正史・稲田孝司・石丸 洋)